

小さな冊子をめぐる那須の旅



早いもので、父が他界してもう 40 年近い年月が流れた。父が残した何冊かの書籍の中に、A5 版ぐらいの大きさと厚さ 5 ミリにも満たぬような小冊子がある。冊子の名前は「那須国造碑考」というタイトルで、栃木県のある村の神社の宮司が書いたものである。冊子は、この神社に古くからご神体として祀られている「那須国造碑」という古い石碑のことについて調べ、整理して述べたもので、大正三年に発行された。生まれ故郷に「那須国造碑」という由緒ある史跡があるということは何度となく聞かされていたが、この冊子に目を通したことはなかった。

この夏、暑い日が続くので家の中での作業にあたる日が多くなり、ある日この冊子を開いて見た。紙は変色し一部損傷も進み、丁寧にページをめくらないといけなような状態に至っているということがわかった。

全頁をスキャナーで読み取って「自作電子図書」または「再生印刷版」を作ってから読んでみることにした。90 頁余からなる冊子を壊さないように気を付けながらスキャナーで読み取る作業は、思った以上に大変な作業だった。時間がある時に少しずつ進め、約二週間を要して画像ファイルができあがった。その後は判読の難しい部分の画像の修正などを行い、さらに二週間ほどで印刷・簡易製本した「復刻版」ができあがった。

巻末に「大正三年改版発行」と書いてあるので、初版は明治時代のものに違いない。冊子を読み始めて見たが、現代人には甚だ読みにくい文章でしかも引用資料や文献として使っているものは明治時代や江戸時代のものなので古文・漢文までが混ざっていて理解するにはかなりの難航苦行だった。というよりも、読めないところや理解できないところはスキップしたというのが正直なところだろう。

冊子を書いた人は伊藤為司さんという、栃木県那須郡湯津上村の笠石神社の宮司。この神社のご神体である石碑とそこに書かれている 152 文字の内容について説明したものである。石碑の上に笠石がのせられていることから笠石神社という名前になったようだ。

草に埋もれて世に知る人もないような一塊の石碑は、笠をかぶっていることから村の人は雨乞いなどに使っていた。延宝 4 年（西暦 1676 年）4 月、磐城の僧円順が草に埋もれた石碑を発見して地元の大金重貞に話したことから、水戸光圀にこのことが伝わり、貞享 4 年（西暦 1687 年）光圀が発掘・調査・検証に乗り出し世に出ることになった。そして、光圀の命により元禄 4 年（西暦 1692 年）に御堂を建てて安置し奉つり笠石神社の起こりとなった。明治 44 年に国宝に指定され、上野国（群馬県）多胡碑、陸前国（宮城県）多賀城碑と並んで日本三古碑と言われている。

書かれている 152 文字の解説を起点に様々な検討が進められ、後世にも新井白石などの多くの学者たちが研究に着手し、現在でもこの道に有る人がいるという。

この冊子は、水戸光圀を中心とした発掘調査とその後の時代の研究者たちの検討結果とを重ね合わせて、著者が私見も含めて「おそらくこの解釈が妥当ではなかろうか」という結論をまとめたものだった。前述のように難解な文章の連続で完全な理解には程遠いかもしれないが、史実と他の学者たちの検討結果などから解を得ていく説明は、推理小説を読むような興味深いものだった。

ご神体である石碑の碑文はこのように書かれている。（漢文を横書きするには少々抵抗があったが・・・）

永昌元年己丑四月飛鳥清浄原大宮那須国造
追大壺那須直韋提評督被賜歳次庚子年正月
二壬子日辰節物故意斯麻呂等立碑銘偲云爾
仰惟殞公広氏尊胤国家棟梁一世之中重被式
照一命之期連見再甦碎骨挑髓豈報前恩是以

曾子之家无有嬌子仲尼之門无有罵者行孝之
子不改其語銘夏堯心澄神照乾六月童子意香
助坤作徒之大合言喻字故无翼長飛无根更固

これまでに解説されたところによると、要旨は以下になるようだ。

「永昌元年（西暦 689 年）己丑（つちのとうし）四月、那須の国造の追大壺（ついだいいち）である直韋提（あたいいで）は、飛鳥清浄原（きよみがはら）の大宮から評督（こおりのかみ）という官職を授かった。

そして時は流れて庚子（かのえね）年（西暦 700 年）正月二日壬子（みずのえね）の辰の刻に逝去された。そこで遺子の意斯麻呂（いしまろ）をはじめとする私たちは記念碑を建てて個人の徳を偲ぶものである。仰ぎみれば、故人は広氏の尊い子孫であり、国家の重鎮とも言うべき人物であった。

その一生は、清浄原の大宮から追大壺に挙げられさらに評督を下賜されるという、二度にわたっての光栄にあずかったのだ。故人の恩徳の偉大さには、私たちが骨を砕き髓をさらすほどの努力をしたところで、到底報い尽くすことはできない。

それほどの徳義ゆえ、曾子の家におごり高ぶるものが一人もおらず、孔子の門流に他人を罵りけなすものなどおらぬように、我が門流にも孝・忠を覆すような愚かなものはいない。『孝を行う子は親の言葉を改めない』と言うが、我々も故人の言葉を固く守って行く所存である。

6ヶ月の喪にある我ら遺子は、偉大なる聖帝・堯の志を肝に銘記し、心を正しくして天を輝かせ、故人の遺徳を思って、地を拓き民を繁栄させるであろう。我々は故人の言葉を堅く受け継ぎ、それゆえ

『故人の遺徳は翼はないが永劫無窮にどこまでも翔けめぐり、故人の名望は根茎はないがどこまでも張り巡らされて盤石のように堅固不滅となる』と銘記するものである。」

碑文に記されている年号が日本の年号ではなく「唐の則天武後の時代に使われた年号」であることなどから、直韋提という人やこの石碑建立に関わった人たちが大陸からの渡来人であることがわかったそうである。また、刻字の字体や官位の表記など読みとった様々な事柄から時代の特定もできたとのことである。また、この笠石神社の周辺にある上侍塚古墳・下侍塚古墳などの遺跡から発掘されたものなどもあわせて様々な検証がなされたようである。

草むらに埋もれた一塊の石碑を気にとめて行動を起こした人、そしてそれを調査し後の世に残すきっかけをつくった水戸光圀、さらにその碑文を解析・研究した新井白石ほか多くの学者たち、それらの情報をまとめて一つの冊子を作った方々。様々な人たちの汗を介して現代に至っているのだということを考えると、一層の興味が湧いてくる。

9月になり酷暑から解放されたある日、那須と塩原の温泉を巡る旅をすることになった。温泉の旅が目的だったのか、小冊子が何かの信号を発してくれたからなのか微妙なところではあるが、那須国造碑とその周囲にある古墳を巡る旅が実現した。

三連休の最終日ならば道路の混雑もないだろうと考えて計画したが、まさにその通り。首都高速道路は通行量が少なく、東北自動車道も流れるように走ることができて快適なドライブでスタート。

矢板 IC で下りて、佐久山を抜けて那珂川沿いの那珂川水遊園を見物して園内のお店で昼食。

昼食の後には那珂川に沿って歴史探索ツアー開始。



最初の目的地の上侍塚古墳は国道 294 号線から少々那珂川側に入った里山の一角にあった。全長 114m の前方後方墳で、後方部の高さは 11.5 m あり、この地域にある古墳の中では最大。出土物や古墳の形などから、4 世紀末頃（古墳時代前期）の築造と考えられている。墳丘の頂点に立つと、東側には那珂川の岸に向かって広がる田圃や畑の豊かな色づきがうかがえて、西側に遠くに那須岳を拝む那須野が原が広がっている。

（左写真：上侍塚古墳 前方から後方を見下ろす）

那珂川沿いにやや北上すると、国道のすぐ脇に下侍塚古墳がある。車の窓からしなやかな曲線が確認できるほどの距離しか離れていない。歩きやすそうな草むらから入って見たら、裏側に入山路が付けられていた。前方後方墳で、全長 84m・後方部の高さは 9.4m、上侍塚古墳よりひとまわり小さいが、那須地方の古墳の中では上侍塚古墳に次ぐ規模と言われており、出土品等からこれも 4 世紀末頃の築造と見られている。



(右写真：下侍塚古墳 国道から見た眺め)

国道をさらに北へ数百m進むと小さな交差点の角に笠石神社を示す看板が見えた。平坦な農地の広がりの中



中にこんもりと茂った緑がうやうやしく感じられる。鳥居の脇に「那須国造碑」の概略説明の看板が建ち、その右手奥に社務所があった。拝観料を払うと奥から宮司が出て来て、やぶ蚊が飛び交う庭で説明の後、鳥居を潜ってご神体拝観の案内をして下さった。厳重に施錠された本殿の入り口は幅 1m 足らずで頭をぶつけないように体を丸めて入らなければならない位の大きさ。ご神体である那須国造碑は高さ 148cm の花崗岩に刻まれたもので、字体から見ると中国の六朝時代の書風と言われている。

(上写真：笠石神社入り口 正面は本殿入口 右手が社務所)

宮司の説明は、前述の要約文に反映したのでここでは省略するとして……

見学と説明が終わったところで宮司に面談を求めた。名刺を見ると「伊藤克夫」とあったので、確かめたところ冊子の著者である伊藤為司さんは祖父とのことだった。

私がここに辿りつくまでの経緯を話した上で、冒頭に記した小冊子「那須国造碑考」の提供を申し出た。もう損傷が進んでいる状態ではあるが、我が家の書架に納めておいても朽ち果てるのを待つばかりか、私がこの世に居なくなったら消え失せてしまう可能性が強い。社務所に展示されている古書の中に同じものはなかったの、おそらく貴重なものとして保存いただけるような気がした。喜んで受け取っていただけることがわかり、お返しにと「那須国造碑（中国・日本史学文学研究会編）」をいただいた。

一冊の小冊子の行く末を如何にすべきかと考えてきたが、歴史の証人の手に渡ることになり、肩の荷が下りたような晴れ晴れとした気分で社務所を辞した。

次の目的地は光丸山法輪寺。疏水の脇に立つこの寺は貞観 2 年（西暦 860 年）慈覚大師円仁が開山。庭には樹齢 800 年の立派な桜が異彩を放っている。西行法師がみちのくの旅の途中で立ち寄った時に詠んだ歌が刻まれており、この桜は「西行桜」と名が付いている。

盛りにはなどか若葉は今とても心ひかる糸桜かな

庭の奥にある墓地を覗いて見たら、きれいに造り直された墓地が広がり、空き地には無縁の古い墓石と思われるものと道祖神のような小さなものが散乱していた。後でわかったことだが、東日本大震災の時にほとんどの墓石が転倒してしまい再整理が進められたとのことだった。先祖代々の墓石を集めて一族の墓を再構築した人もいれば、経済的に困難で手が付けられなかった人もいるし、長い年月のうちに墓守がわからなくなり手の付けようがなくなってしまった墓石もあるということのようだった。

遠縁の人の墓石が確認できたので安心して墓地を出た。これにて今回の旅の主計画は終了、広く長くゆったりと広がる那須野が原を上って、予約してある那須の温泉に向かった。

今を遡ること 1400 年余り、那須国があったこと、大陸から渡来した人がいたこと、その国造が渡来人だったこと、それより何百年も前にこの地に大きな墳墓がいくつも作られたこと、などなどわかったことを羅列して見ただけでもワクワクするような話ばかりだ。大化の改新前後の時代を思い浮かべるばかりか、江戸時代の水戸光圀のことなどにも思いを馳せ、大変有意義で愉快的旅を体験することができた。

以上

◆参考情報

那須国造碑（大田原市ホームページ） <http://www.city.ohkawara.tochigi.jp/docs/2013082778383/>